

## 現状と行方

——中国における死の哲学、三十年間の研究状況

靳鳳林

中央党校教授

死とは、人類にとって永遠の謎であり、宇宙のあらゆる謎のなかでも最も難解な謎で、人類文明が歩む道に高くそびえたつ難攻不落の要害である。だからこそ、人類は誕生の日から、すぐに死への思索をはじめた——ソクラテスは哲学を死の練習と定義したし、フオイエルバッハは、この世にもし死という出来事がなかったとしたら、宗教はなかっただろう、と断言した。また、シヨーペンハウアーは、死とは哲学に靈感を与える守護神であると言った。中国の儒学派は、身を殺して仁を成す・生を捨てて義を取る・終を慎しみ遠を追う、と主張したが、その核心的な思想は、孔子の「未だ生を知らず、焉ぞ死を知らんや」である。宇宙の本質は「生」であり、天地には「好生之徳」があり、万物を創生し、また万物を長養している。そうである以上、人も「生生にして息まざる」精神をもって、生命を大切にし、人事を重視して、心性を修養することで、天徳にそぐうべきである、これが彼らの強調するところである。道家も同様であり、老子と荘子とは「生を出で死に入る」、「方に死すれば方に生ず」と強調してはいるものの、道家の出発点は「生を全うし害を避く」である。こ

ここでいう「生を全うし」とは、つまり生命を保つことであり、「書を避く」とは、生命を脅かす各種の力を排除することである。東西の悠久なる学問発展史上においては、生死の問題を直接議論したり、またはそれに触れている論著・経巻は大量にあるが、本当に死という現象をひとつの専門的学術問題として系統的に研究した哲学者は、実は夜明けの星のごとく少ないのである。哲学の一分野としての死の哲学は、二十世紀後半になってようやく世界的に徐々に形成されてきた。一方、中国の学術界において死の哲学にたいする系統的な研究がはじまったのは、一九八〇年代になってからである。本論文は、ここ三十年間の中国における死の哲学研究の基本的な状況について、マクロのレベルから俯瞰的な理解を試みたものである。

## 一・ 改革開放以来、中国において死の哲学研究が興起した社会・歴史的背景

周知のように、建国より後、マルクス主義は中国社会の主導的地位を占めるイデオロギー理論となっている。その本質についていうならば、マルクス主義は人類解放の社会条件に関する学説であり、死の問題についての研究は、人類が自らを解放する条件として、必然的にマルクス主義の視野の内に含まれているのである。ただ長い間、マルクス主義理論にたずさわる者は、大部分がこの問題の研究に注意を払わなかった。その理由には、以下のものがある。ひとつめの理由は、認識上の困惑である。マルクス主義の創始者たちにとっては、群衆の革命運動という問題が彼らの理論のなかで大きな比重を占めていて、しかもそれに彼らの全精力が費やされた。それゆえ、個人の生死という問題は二次的なものとなり、マルクス主義の創始者はこの問題に気を配っていなかったという印象を人に与えるようになった。こうして後世の人はそのなかから関連する理論根拠を探し出せなくなってしまうのである。二つめの理由は、その複雑な理論背景である。新中国建国から「文革」が終わ



靳鳳林氏

るまでの二十数年という時間のなかで、「左」傾思潮が終始、学術界における理論研究の内容と形式に影響を及ぼしつづけており、西洋学術界の死の問題に関する研究は、資産階級の腐朽没落思想の具体的な体現と見なされるのが普通であった。それゆえ、この学術界の禁忌に敢えて手をだそうとする人はとても少なかったのである。

人大十一届三中全会の後、中国社会の経済・政治・文化などの各領域では、天地がひっくり返るほどの大きな変化が生じた。過去にそれに手をだした人もおらず、またそれが憚られてもいた学術界における多くの禁忌が、今日の学界では衆目を集める問題となったのである。死の哲学もまさしくそのなかのひとつである。以上のことから言えるのが、死の哲学の研究を中国改革開放後の総体的な背景の下におさめて検討しないかぎり、それを生み、発展させ、絶えず成長させる社会歴史的根源を正しく説明することはできない、ということである。

第一に、社会主義的市場経済の大規模な実施によって、中華民族の生存と発展の社会心理的環境は極めて大きな変化を余儀なくされたが、それは死の哲学研究の興起にとって、有利な学術的契機となった。

改革開放の後、中国社会の経済発展は、計画経済から計画的商品経済、そして、今日にいたる社会主義的市場経済といった、いくつかの異なる発展段階を経てきた。中国大地の上でなされる市場経済という偉大な実践は、あたかも山をゆきさぶる台風のごとく、人々を平静な生活からはっと飛び起させ、無数の人は茫

然自失に陥った。一九八〇年の第五期『中国青年』という雑誌に潘曉という名で発表された「人生の路よ、どうして歩くほどせまくなるのか……」「人生的路呵、怎麽越走越窄……」という文章によって、改革开放初期の中国社会において、人の生死観という問題をめぐって展開した、かの有名な「潘曉大討論」が巻きおこった。討論の内容が日ましに深くなるにつれて、殊に改革开放の歩みが絶えず加速するにつれて、人々は、市場経済の客観的必然性が示す、現代経済生活におけるながしかの共通的特徴に、少しずつ気がつくようになっていった。その特徴とは、能力・競争・機会・激変である。個人の天賦の才能と本人の努力の程度に関係することのような社会の往来形式は、各レベルから現代社会におけるひとりひとりの生活面での心理的プレッシャーを増大させ、かつての田園牧歌的な自然経済のなかでの貧しいながらもそれに甘んじる憂い無き生活に、緊張・焦慮・不安につつまれた生活がとってかわったのである。社会主体の財産の増長と物質的生活水準の向上は、人生の孤独・憂悶・喪失感を取り除くことはできなかった。それどころか逆に、各人が社会生活に参与する際の競争性と変動性の激化によって、現代人がもつ個人の生命価値への関心は、それまでのいかなる時代よりもより敏感になったのである。以下の事実がこの点に関して十分な説明を与えてくれる。唯物論と無神論とは、中国社会の広範にわたって伝播したが、一般大衆の不死なる靈魂への欲求に打ち勝つことはできなかった。祈祷師や巫女の類からコンピューター占いにいたるまでの封建的な迷信活動はなかなか取り締まりきれなかった。先に豊かになった人たちのなかでは、墓の修復、先祖の祭祀、死者の供養、といったようなことが、極めて一般的に見られる。インテリ層が怪奇現象に夢中になるのは決して珍しいことではない。近年来、社会の各階層で、精神疾患と鬱病のために自殺に走る人数が急激に増えている。キリスト教・仏教・イスラム教などの各種宗教の信者がますます勢いで増えている。アメリカの人民寺院教や日本のオウム真理教と同質の法輪功など非法的なカルト団体がしばしば現れ、しかも根絶することが困難である。こういったあらゆる現象はすべて、生と死

という両極にたいする人々の思考と密接に関係している。端的にいえば、市場経済により引きおこされた競争のプレッシャーが、現代人にとって最大の精神的抑圧のひとつとなっているのである。

第二に、現代科学技術の長足の進歩は、一方では人類の生死という現象のコントロールを容易にしたが、もう一方では、人類の生と死の本質にたいする認識を、憂慮と困惑で満たしもした。

最近の数十年間で、人々が見聞きした科学技術の進歩の成果は、数えきれないほどである。特に、人類の生死と緊密に関連する生物医学技術の成果には、目を奪うほどすばらしいものが多くある。遺伝子クローン・臓器移植・性別選択・試験管ベビー等等、このほかにいくつでも挙げることができよう。いずれの技術の発明・応用も、すべて人類の生命と生活に驚きと喜び、そして快楽をもたらしてくれるが、それと同時に、これらの技術成果は人類の生死を無限の憂いと困惑とで満たす諸刃の剣でもある。遺伝子クローン技術を例としよう。「ドリー羊」が世に問われた時、国際社会に広範な争議が巻き起こった。これを支持する者の考えかたは、遺伝子クローン技術は、人類の生命が優れたものになるという希望をもたらし、人類の生殖技術の選択に多元的な道を提供してくれる、というものであった。一方、反対する者の考えかたは、次のようなものである。遺伝子クローン技術を人類に应用すれば、必然的にアイデンティティーの危機・人倫関係の混乱・家庭構造の瓦解など数多くの社会倫理と法律の問題をもたらす。また、臓器移植技術は、レシピエントに巨大な生命空間を提供し、死の脅威から救ってくれるものの、生体移植の場合、ドナーにもたらされる生命健康・生活の質・心理的な圧力は巨大なものであり、さらにはそれが生体の臓器であれ、死体の臓器であれ、世界各国で非合法的臓器売買が行われ、様々な社会問題を引きおこすままでになっている。たとえば、法律を無視して、浮浪者を拘禁しその臓器を摘出したり、死刑犯の臓器をひそかに盗みとったり、経済的に貧窮した家庭が臓器を売ること余儀なくされたりと、世人の心胆を一層さむからしめるものがある。妊娠の前、或いは後に性別選択技術を

施すことは、性別の影響をうける病気の抑制・家庭における幸福の促進・出生率の低下などのいずれにたいしても、重要な積極的意義があることは疑いないが、その一方で、男女比の不均衡・男尊女卑という觀念の強化を社会にもたらすことになる。ある研究によると、ひとつの社会において、男性比が女性比よりも一〇%以上高くなった場合に、男性の同性愛、および一妻多夫（それが公的のものであれ、私的なものであれ）などの現象が増加して、それにより、社会の安定と伝統的な法律・道徳規範は危機に瀕することになるといえる。以上から、次のことが容易にわかるだろう。現代科学技術の著しい進歩が人類の生死観に与える影響は極めて大きいものであり、人類がどのようにして前述の様々な二律背反的生存上の苦境から脱出するのか、これには疑いなく現代的意義にたつた生死哲学によって心配を除き困難を解決する必要があるのだ。

第三に、自然災害・生態系のバランス崩壊・原因不明の難病など、各種の大規模な天災人災の発生が日ましに人類生存上の強力な敵となっており、人類と死との戦いをより高いレベルへとおしあげている。

自然災害とは、人の力では如何ともしがたい各種の自然界の力が、尋常ならざるかたちで、人類の生命・財産にもたらす災害をさす。水災・風災・震災・干魘・津波・雪崩・土石流・火山噴火などがそうであり、自然災害の形成は天文・地理・人類などの多くの要因が重なった結果である。人類誕生の日から、各種の自然災害が人類につきまといってきたが、現代社会の各種の災害現象の膨大・複雑さは顕著な特徴を呈している、すなわち、自然災害が発生する原因は人類の社会活動の影響と密接に関連しているのである。先進国・発展途上国にかかわらず、工業の発展・都市の繁栄・経済の成長の過程で、大量の固形廃棄物・廃ガス・廃液が排出され、全地球規模的な各種の環境問題がもたらされる。温室効果・オゾンホール・海水面の上昇などがそうであり、これらすべてが人類の未来の命運に大きな脅威を与えている。洪水と冠水・干魘・暴雨といった、過去には純粹に自然によるものと考えられていた災害現象も、今日の眼から見ると、それらが生じる過程にも、現代人が

見境なく自然を改造しようとする不適切な行為との関連を見てとることができる。たとえば森林の濫伐・草原の破壊・湖の田地化などであり、さらにスモッグ・酸性雨・砂嵐といったものは、人為的要素が直接つくりだしたものである。これらすべてによって人類は、自己の生命にたいする大自然の無情なる罰・報復を招くのである。このほか、伝染病の爆発的発生もやはり人類の健康にとって敵であり、歴史上、ペスト・ハンセン病・ジフテリア・肺結核などが人類の生存にとって大敵であった。一九七〇年代以後は、さらにHIV・鳥インフルエンザ・狂牛病などが人類の生命に大きな脅威を与えた。また経済のグローバル化・人の移動の激化・交通の加速によって、新旧の伝染病は絶え間なく発生し蔓延するであろう。WHOは以下のように警告している。SARSの流行は、人類がすでに地球規模的な伝染病の危機に瀕していることを示しており、人類はできるだけ早く地球規模で新しく発生する伝染病の予防と検疫の体系をつくらなければならない、と。また、アメリカの有名な『サイエンス』誌に発表された論文では、次のように述べられている。人類は各種の大規模な伝染病と闘う過程で、数多くの有効な方法を見つけてきた。それは伝染病の原因の管理とコントロール・伝染ルートの遮断・特定の伝染病にかかりやすい人々の保護などである。しかしながら、人類が短期間ではコントロールできない要因もある。たとえば、ここ数年に地球規模で爆発的に発生した五十あまりの伝染病は、みな気温の上昇と関係がある。なぜなら地球温暖化によって、数多くのウイルス・病原菌の活動が活発になり、また蚊などの媒介生物が大量に繁殖したからである。人類と死との戦いが今まさにより高いレベルへおしすめられていると同時に、死を招く災難を認識することによって感じる不可避な恐怖も、現代の人類にとって精神的プレッシャーのひとつになるであろうことを、これらの現象は示している。

第四に、高齢化社会の到来により、健康長寿が指向され、人類は「死の質を向上させる」という全く新しい課題に取り組まなければならないようになった。

統計によると、現在、わが国の六十歳以上の高齢者の人口は約一億四四〇〇万人で、総人口の一・〇三%を占めている。そして高齢者人口は、二〇二〇年には二億四三〇〇万、二〇三〇年には三億五一〇〇万、二〇五〇年までには四億五〇〇〇万に増え、その時には総人口の三〇%を占め、ピークに達するという。高齢者人口の急激な増加は中国社会の発展にとって、大きな負担となるだろう。老人介護政策・医療保障・福祉サービスなどである。だがさらに重要なのは、このような人口構造の持続的な変動にともない、高齢者の死という個人にとっての意味と、社会への影響とは、より深刻な変化を生むことである。伝統的な優生学は、これからは子どもの出産と育成の優化選択に限ることができず、高齢者の生活環境と死亡の制御にまでその範囲を拡張し、出産と育成だけでなく、「死の質を向上させる」という全く新しい課題を解決しなければならなくなる。特に核家族化と一人っ子家庭の普遍化により、病死・非正常死という衝撃に耐える家庭の力は弱くなるだろう。各種の死が家庭にもたらす強烈な衝撃を減らすために、死に瀕した高齢の患者のみならず、家庭を構成するうちの、青年から青少年にいたる層にまで、死にたいして心の準備をするような教育を行わなければならない。その時には、すでに学術界で広く議論されてきたターミナルケアや安楽死などの問題は、必ずや、わが国の未来において哲学・倫理学・医学・社会学・教育学・宗教学など多くの学術分野がともに注目する問題となり、また立法と公共政策が考慮する重要な対象のひとつとなるにちがいない。

## 二. 最近三十年間の中国における死の哲学研究の基本的現状

死の医学・死の心理学・死の教育学・死の社会学など、死にかんする実証科学とは異なり、死の哲学が注意を払い重視してきたのは、呼吸死・心臓死・脳死といった具体的な死の基準ではなく、また自殺・他殺・死亡



率といった死の事実的な問題でもない。死の哲学が探求してきた核心的問題とは——死の本質・死の価値・死の意義・人類が死と向き合う態度・人類が死を克服超越する方式といった類の、いずれも超経験的かつ重要な理論的問題である。端的にいえば、死の哲学とは、人類の死という現象にたいして形而上のレベルから思弁的研究を行う哲学内の一分野である。最近三十年間の中国における死の哲学研究の基本的現状を俯瞰すると、その主な内容は以下の五つの領域に概括・区分することができる。

### 一——マルクス主義的の死の哲学研究

伝統的なマルクス主義哲学は普通、唯物論・弁証法・認識論・唯物史観をその主要な研究内容と見なし、人の生死観という問題はその視野にはほとんど含まれていない。しかし、改革開放以来、学术界がマルクス主義哲学の研究に日ましに没頭していくにしたがって、すでに多種多様なマルクス主義哲学の形態が、その誕生の日から伝播と変遷の過程において形成されてきたことに、人々は段々と気づくようになった。本質的にいえば、マルクス主義哲学とは一種の非教条的・開放的・質実的・批判的な哲学である。近年来、一部の学者が生死学の視点からマルクス主義哲学にたいする研究を展開し、すばらしい研究成果をおさめてきた。マルクス主義的の哲学にたいする国内の学者の研究は、以下の三つにまとめることができる。

ひとつめは、マルクス主義的の死の哲学史研究である。はたして、マルクス主義哲学には、死の哲学にかんする内容は含まれるのかどうか？ これはかなりの長期間にわたって多くの議論がされてきた話題であった。国内外の多くの学者の考えは、マルクス主義者は主要な精力を社会発展の規律と社会変革の問題に注いでいて、それと比べて個人の死の問題は注意されていない、というものである。一方、段德智は『死の哲学』〔死亡哲学〕

という本のなかで、これとは全く逆の結論を導き出している。まず、彼はマルクス・エンゲルス・レーニン・毛沢東ら無産階級革命家の死にたいする見方について、個別的な研究を行っている。人の有死性と不朽性の弁証法的連結・個人の生命の有限性と群衆の生命の無限性の弁証法的連結・個人の死の価値と人類の解放という大事業の弁証法的連結などの問題に触れ、経験のレベルから、マルクス主義的の死の哲学は一種の無産階級による革命の実践にともない、絶えず深化しかつ発展する動的な系統であると説明した。そして、マルクス主義的の死の哲学と人類の死の哲学史の関係という角度から見て、彼は、マルクス主義的の死の哲学は開放的な心理状態と止揚的な原則によつて歴史上の各種の死の哲学に向き合い、それまでになかったほど豊富で、他に比べるものがないほどの深い内容を含み、無産階級の革命と建設事業への奉仕という強烈な属階級的・実践的特徴をもつと表現した。最後に、現代の他の哲学各流派との比較から、次のように述べている。マルクス主義的の死の哲学は、現代無産階級の階級特性と歴史的使命を自覚するとともに、それらを自らの物質武器とする唯一の死の哲学である。そして、我々が生きるこの時代において、今後も最高の死の哲学でありつづけるにちがいない、と以上が本書の内容である。

二つめは、マルクス主義的死亡の哲学にかんする特定のテーマの研究である。生と死という矛盾する統一体のなかで、人々は死をコントロールすることはどうしてもできないが、生をコントロールすることはできる。そこで、生存論の視点から、マルクス主義的の死の哲学に対する特定のテーマの研究が行われ、改革開放以来のわが国のマルクス主義的の死の哲学研究の別の景観が生みだされてきた。文革の時期に「階級闘争」と「全面專政」という大義名分のもとで熱狂的に進められた異端迫害の数々の暴行が、一九七〇年代の終わりから八〇年代の初めにかけて摘発されるにつれ、人間性のなかに潜む各種の非人道的な罪悪の一面に、人々は驚きと恐怖感をおぼえ、人道主義と疎外の問題とが哲学界の議論の焦点となり、人の生と死の尊厳という問題が一時、

人々の心をとらえた。人道主義の問題をめぐる討論が少しずつ深化するにつれて、人にかかわる問題は、主体的な論題として洗練したものになければ、理論的に深めることはできないということに人々は気づいた。かくして、九〇年代の初期と中期に、主体と客体の関係という問題・主体と実践の問題がマルクス主義哲学のなかで広く議論されるようになり、主体性という問題が議論されるなか、人類の死の意識の生成と主体性の確立という問題が一部の学者の関心をひいた。人々は、主体性という問題について研究するなかで、主体性の問題が認識論の領域を突破し、さらに広い価値論の領域に向かわないかぎり、人の需要・実現と意義という問題を全面的に理解することができないことに気づいた。これによって、価値哲学が九〇年代末の学界で問題の焦点となり、価値哲学にまつわる議論のなかで、人の生死の価値という問題が人々の広い関心を集めた。人々は人道主義・主体性・価値哲学などの問題について長期間にわたって議論するうちに、人に関する多くの問題を包括することのできるひとつの哲学をうちたてる必要があることを切実に感じるにいたった。そこで必要に応じ、マルクス主義的人文科学の理論が生まれ、人の生死という問題をめぐってなされた議論は、人文科学理論という範囲において、さらに深化した。最近の三十年間における、中国マルクス主義哲学理論の焦点の変遷は、社会歴史のレベルの大規模な事柄の記述から個人の生活世界へと徐々に接近する過程を経ており、人の死という問題は、主題を変えながらも、常に人々の高い関心を集めていたのである。

三つめは、マルクス主義的生死哲学体系の樹立である。人の生活世界で最も根本的な問題とは何であろうか？ それは疑いなく切実な回答を必要とする問題であり、近年来、一部の中年・若年層の学者がその樹立を試みたマルクス主義的生死哲学の体系が、この問題に初歩的な回答を与えている。たとえば、張曙光の『生存哲学』は、生存哲学の命題・生存哲学の定義・生存の不確定論とその超越・生命機能と生存法則・人の生存方式とその変移・生存の意義とその明察などの各レベルから、彼が理解するマルクス主義生存哲学体系が内包す

る主要なものを紹介している。鄒詩鵬の『実践生存論』は、実践生存論が何によって可能となるか・人の生存の意義の説明・人の生存に内在する矛盾とその止揚などの問題を扱っている。賀来の『弁証法的生存論基礎』は、マルクス主義哲学の核心概念——弁証法に注目して、マルクス主義生存哲学の本体論の基礎を構築し、人の本源的生存方式と弁証法の真実基礎・弁証法が人の生存にかんずるということに内包する論理・マルクス弁証法的生存論の趣旨・弁証法的生存論の基礎の異在化表現などの重要な内容を扱っている。

## 二——中国における伝統的な死の哲学研究

最近三十年間に、中華民族の生にして息<sup>や</sup>まざる無尽の動力は、中国伝統文化中の死にまつわる哲学思想を深く掘りおこした。中華文化とは、そうした営みが構築した、中国の死の哲学研究における、もうひとつの重要な領域である。学術界において中国伝統の死の哲学にたいする研究は、主に以下の二つの方面に集中している。

ひとつめは、中国の伝統的な死の思想史にかんずる系統的研究所時代の研究である。この領域の代表的な著作は、鄭曉江の『中国生命学——中華賢哲の生死の智慧』『中国生命学——中華賢哲之生死智慧』である。これは、中国の様々な時代の、それぞれ代表的な思想家の生死観について系統的研究を行ったものであり、特に陶淵明・周敦頤・陸九淵・文天祥・王船山といった人物の生死の智慧について微に入り細を穿つ分析をしている。また、『人生をつらぬく』『穿透人生』『死の超越』『超越死亡』『善き死と善き終焉』『善死与善終』『宗教生死書』『中国の死の文化大観』『中国死亡文化大観』といった彼の他の著作も、各時代の各種の思想流派に見られる生死観について深く調べている。改革開放の後、鄭曉江は中国学界の生死哲学研究の先駆者として、長い間、

中国の伝統的な生死文化の資料発掘に尽力し、その研究に特筆すべき貢献を果した。このほかに取りあげるに値するのが、韓国の学者、具聖姫が中国大陸で完成させた『漢代人の生死観』〔漢代人的生死観〕という一書である。本書は考古学・文献学の方法を利用して、中国漢代人の死にたいする態度を明らかにし、中国の死の思想における時代史的研究の端緒を開いたというにたるものである。

二つめは、中国伝統文化の軸——儒・仏・道の死の思想についての研究である。この類の研究は、さらに総合的研究と分類的研究の二つに分かれる。総合的研究には、袁陽の『生死事大』があり、儒家における生死の超越・道家における生死の逍遙・道教における不死の希求・仏教における生死の寂滅といった内容を扱っている。筆者の『生死線を窺う』〔窺視生死線〕は、儒家が死を超越するために行った道德の開拓・道家の生死という命題にたいする美醜を見分ける観照・道教の生命の無限への執着と追求・仏教の涅槃という世界における人生への希望、および中国の幽霊文化・葬礼文化・死を扱う文学などに深く踏み込んでいる。特定のテーマをもった研究著作には、趙有生・劉明華らの『生死・享楽・自由』と、李霞の『生死の智慧——道家の生命観の研究』〔生死智慧——道家生命観研究〕があり、彼らは道家と道教の生死観の問題に深く取り組んでいる。とりわけ李霞の道家の生死観にたいする研究は、道家の、道生じて徳成るといふ生命の本源観・陰陽の気が化するといふ生命の構造観・肉体と精神とが互いに依存しているといふ生命の構成観・生と死とが交替するといふ生命の過程観・人を重んじ生を貴ぶといふ生命の価値観・自然にして素朴といふ生命の本質観などの多くの内容を扱っており、道家の生死観にかんする研究の水準を大幅に引きあげた。また、陳兵の『生と死——仏教の輪廻観』〔生与死——仏教輪廻観〕とソギヤル・リンポチェの『チベット死者の書』〔西藏生死書〕は、仏教の生死観について深いレベルから説明している。特に『チベット死者の書』は生・死・再生という三つのレベルからチベットに伝わる仏教の生死の修習方法について深く解き明かしていて、社会の広い反響をよび、仏教における

生死という問題にたいする人々の強い興味を引きおこした。

### 三——西洋の死の哲学と死の神学の研究

十年間におよぶ文化大革命は中国人に巨大な精神的傷跡を残した。この大災難が終結した後、多くの人が人生や社会にたいして虚しさを感じ、伝統的な価値にたいして深い懐疑の態度をとるようになり、人々はもはや政府のイデオロギーと社会体制を信じることができなくなった。このような状況は、第一次・第二次世界大戦後の西洋人の心がたどってきた道とよく似ており、かくして、その一時代に生まれた西洋の実存主義哲学が中国社会で急速に流行しだした。古い生の哲学派に属するショーペンハウアー・ニーチェ・キルケゴールの著作が人口に膾炙しただけでなく、新しい実存主義哲学の代表的人物であるサルトル・フロイト・ハイデガーらの作品も人々の好評を博した。『意志と表象としての世界』『作為意志と表象的世界』『権力の意志』『権力意志』・『存在と虚無』『存在と虚無』・『存在と時間』『存在と時間』・『神・死・時間』『上帝・死と時間』・『シエラーの『死・永生・神』『死、永生、上帝』などの著作の翻訳出版は、西洋哲学において生死という問題をめぐってなされた探求にたいして、より深い認識を人々にもたらした。実存主義的生死観の学術的研究著作が陸續と出版された——周国平の『ニーチェ——歴史の転換点において』『尼采——在歴史的転折点上』・『詩人哲學家』は、その当時多くの人の心を激しくゆさぶった。葉秀山の『思・史・詩』、杜小真の『ある絶望した者の希望』・『一個絶望者の希望』、何懐宏の『生命と自由』『生命と自由』、彭富春の『無の無化』『無之無化』、黄裕生の『時間と永遠』『時間と永恒』などの著作は、みな実存主義哲学の核心問題——すなわち、死を、深く探求している。特に段徳智の『死の哲学』『死亡哲学』は、さらに広い視野に立つて、西洋の古代ギリシア・中世から近現

代にいたるまでの著名な哲學家の死の思想にたいして、系統的な整理を行つてゐる。その構想は高邁、史料は詳細かつ正確で、わが国における西洋の死の思想史研究に重要な貢献を果した。また畢治国の『死の哲学』『死亡哲学』・『死の芸術』『死亡芸術』は、西洋哲學家が死という問題に関連して論述した多くの資料を、系統的に整理してゐる。

西洋の死の哲学研究にともなつて生まれたのが、西洋の死の神学思想研究である。キリスト教は多大な影響力をもつ世界宗教であり、歴代の神学思想家はみな、生死という問題にたいして、深く思索してきた。とりわけ、現代の実存主義的神学は、この問題にたいして、さらに多くの精力を注いできた。ブルトマンの『イエス・キリストと神話』『耶穌基督与神話』、ユングルの『死論』、オットーの『思想と存在』『思想与存在』などの著作は、個人の生存とキリスト教信仰・個人の生存の質の内在構造と神臨在の本体論の関連などの諸問題を、追求してゐる。また、マリタンの『存在と存在者』『存在与存在者』、ニーバーの『人の本性と運命』『人的本性及其命運』、ティリツヒの『存在の勇氣』『存在的勇氣』、モルトマンの『神の來臨』『上帝的來臨』などの著作は、系統的神学の重要論題——末世論に注目し、個人の死・人類の滅亡・宇宙の終結といった重大な問題についての考察を重ね、人類の主体性の終極的存在・人類の生命の有限性と依存性・人類はいかにして生活の深度を追求するのかという問題について、ホスピスの視点に立つた見方を提出してゐる。

これ以外にも、近年来、国内では哲学・神学などの異なる角度から死という問題を考える西洋の学術的にもしくは一般向けの書籍が大量に翻訳・出版されている。代表的な作品としては、ポイマン (Loius P. Pojman) の『生と死 現代道徳の苦境と挑戦』『生与死：現代道徳困境的挑战』、シエルウィン・ノーランド (Sherwin B. Nuland) の『我々はどうに死ぬか』『我們怎樣死』、レヴィン (S. Levine) の『生死の歌』『生死之歌』、ジェームズ・ヴァン・プラグ (James Van Praagh) の『天国との対話』『与天堂對話』、エルンスト・ベッカー (Ernest

Becker) の『死の拒絶』「拒斥死亡」、エリザベス・ロス (Elizabeth Kübler-Ross) の『死と瀕死』「死亡と瀕死」、トウルニエ (Paul Tournier) の『生命の四季』「生命的四季」、クラマー (Kenneth Paul Kramer) の『神聖なる死の芸術』「神聖的死亡芸術」、ティリーケ (Helmuth Thielicke) の『死と生』「死与生」、ノーマン・ブラウン (Norman O. Brown) の『生と死の対立』「生与死的対抗」、デュルケム (Emile Durkheim) の『自殺論』、ベクルの『死にむかって生きる』「向死而生」、アットウォーターの『人生の変奏曲 生と死にたいする適応』「人生変奏曲：対生和死的適応」などが挙げられる。

#### 四——死の哲学の応用研究

もしもわが国の学術界において、国内・国外の死の哲学と関係のある研究が、主に形而上の角度から死の本質・価値・意義などの問題を探求したものであるとすれば、死の哲学の応用研究は、形而下のレベルからの現実の生活、および死と関係する各種の具体的な問題の探求を重視しており、その内容は死の倫理学・死の美学・死の社会学・死の心理学・死の教育学・葬送文化学にまでおよぶ。たとえば邱仁宗・王延光・孫慕義らは、その生命倫理学と関係する多くの著作のなかで、自殺・安楽死・ターミナルケアなどの問題にたいして、詳細な研究をしている。また、厳翔林は『死の美学』「死亡美学」のなかで、芸術的主体の死の克服・生命力をあらわにするという視点から、死と芸術美との関係を追求している。楊鴻台は『死の社会学』「死亡社会学」のなかで、死に影響を与える文化理念・社会要素・主要方式などの問題に、社会学の角度から迫っている。湯笑の『死の心理の秘密を探る』「死亡心理探密」は、SARSが引き起こす死の恐怖から説きおこし、生命意識・寿命の長短・瀕死時の心理状態・不死への憧憬といった死の心理的な問題を探求している。郭于華の『死への



困惑と生への執着」「死的困擾与生的執著」は、民俗学の視点から死にかんする習俗の問題を追求している。王夫子の『葬送文化学』『殯葬文化学』は、あらゆる方向から死の文化を読み解いており、死の文化大全というにたるものである。その提唱するところの、中国に特徴的な出棺・喪葬・祭祀文化モデルは、その後の葬儀の行い方に指針を与えたもので、人々が中国の伝統的な葬送文化の歴史的価値を正しく認識するのに、重要な役割を果たした。また、彼が長沙職業技術学院で創立した殯葬礼儀系も、死の哲学を実際の生活において実践的に運用した文化モデルと見なすことができる。

死の哲学の応用研究がもつもうひとつの重要な内容は、死という現象にたいする個人の実証と実感である。周国平の『娘よ——ひとりの父親の札記』『妞妞——一個父親の札記』は、ひとりの哲学者である父親が愛娘を失った悲しみに沈むなかで、その心の軌跡を描いたものである。それは物悲しく、そして人の心をうつ美しい物語で、人を深く考えさせる哲理に富んだ物語でもある。そのなかの生死という問題にたいする思考は、無数の読者の魂をゆさぶり、アメリカの医学大学はそれを医学倫理学の必読書のリストに入れていた。陸幼青の『死の日記——生命の伝言』『死亡日記——生命的留言』は、彼自身が癌を発症してから世を去る数ヶ月間までの、生死の縁に立ち心の奥底で感じたことを記録したものである。崔永元・白岩松らメディア界の著名人によるインタビューの報道を経て、社会の広い関心を当時集めたもので、生死という一大事を人々は深く考えるようになった。また、潘英甲の『死のインタビューの手記』『采访死亡手記』は、記者という身分と視点によって、葬儀の執行・人体解剖・重大な飛行機事故の内に潜む生命理念・死の文化といった問題にたいして、立ち入った報道をしている。これによって、死と関係のある、医療・葬送・安全など社会各界における職業管理問題への認識が強まっている。

## 五——台湾地区の死の哲学研究

死の問題にたいする台湾学術界の研究は、大陸よりもその歴史が長く、また専門学術機構もすでに成立している。たとえば、仏光大学南華管理学院の「生死学研究所」は、世界初の生死学研究所と称賛されている。台湾の生死学研究は、故傅偉勳氏による全力の推進活動と密接な関係がある。その『死の尊厳と生命の尊厳』〔死亡的尊嚴与生命的尊嚴〕という著書は、「生死学」によって「死亡学」を包括しようと尽力するものであり、現代生物学の構築と発展・世界宗教と死の超越・古今の中国国内外における生死についての智慧・文学芸術の生死の表現・生死という問題にまつわる科学と実際の整合といった、多くの視点から生死という問題を検討しており、台湾の生死学研究の基礎を構築し、その方向性を明示した。近年来、台湾の学術界における生死学研究は活発さを増している。代表的な著作は、揚国枢主編の『現代生死学叢書序列』（全七冊）、張淑美の『死亡学と死の教育』〔死亡学与死亡教育〕、陶在樸の『理論生死学』、林綺雲の『生死学』、尉遲淦の『生死学概論』、呂心鍾の『現代生死学』、曾煥棠の『生死学の実務検討』〔生死学之実務探討〕、鈕則誠の『医療看護生死学』〔医療看護生死学』、『生命教育概論』の数十種である。<sup>1</sup>

生死という問題にかんして、台湾の研究状況を概観すると、二つの主な特徴を指摘できる。ひとつには生死哲学の応用研究がかなり大きな比重を占めるということである。生死という問題を研究する台湾地区の学者の多くは、医療看護との関係が密接な医学大学に集中している。このため、彼らの生死の問題にたいする研究はいやおうにも生死にかんする実務上の具体的操作に重点が置かれることになる。台湾の教育主管部門が生死への配慮という問題を、初・中・高等教育の必修内容とすることを決定してから、教育界の多くの学者が生命教育の視点から生死という問題の研究に集中的に取り組み、多くの研究成果をおさめてきた。当然のことながら、

台湾にも生死という問題にたいして、形而上哲学のレベルから深く検討を加える学者もいる。たとえば、陳俊輝は『ハイデガーの論じる存在と死』、『海德格爾論存有与死亡』・『生命思想VS.生命意義』などを著している。二つには、西洋の生死哲学、およびその応用研究の成果の積極的な取り入れがある。傅偉勳氏が台湾地区で生死学の構築を提唱してからというもの、台湾地区の学者は、ずっとイギリス・アメリカなどの西洋各国の関連する研究成果を極めて重視しており、自家薬籠中のものとしている。このことは、その出版物が用いている資料の種類を見ればわかる。近年来、鈕則誠を代表とする一部の学者が「華人の生死学」の構築を強調しており、中国の豊かな伝統文化の基礎の上に、自身の生死についての智慧を生みだそうとし、しかもすでに喜ばしい研究成果を得ている。彼らの『生死学』という一書こそが、このことの例証である。

### 三、中国における死の哲学研究の行き先

孔子はかつて、「故を温めて而して新を知れば、以て師為る可し」と指摘した。まさしく、ひとりの人間がたゆまず古い知識を理解して繰り返し学習しさえすれば、新しい知識を獲得することができ、師がいなくても自ら物事に通じるのである。死の哲学の研究もまたこれと同様である。わが国において死の哲学が興起した社会歴史背景とこれまでの研究の現状を分析することで、我々は、さらに中国における死の哲学研究の行き先を把握することができるのである。筆者が思うに、中国の死の哲学研究は、最近の三十年の間にすばらしい成果をおさめてきたが、さらなる研究の余地はいまだ多く残されている。

第一に、死の哲学研究の分野モデルの確立がある。

先に述べたように、近年来、国内の学界において、死という問題に関する論者はすでに数多くあり、その多

くが総合的研究の特徴を有している。たとえば翟曉梅の『死の尊厳』『死亡的尊嚴』、張三夕の『死にたいする思い』『死亡之思』、孟憲武の『人類死亡學論綱』、黃英全の『生死之間』『生死之間』など、これらの著作は死の哲学における多くの問題にたいして、深く検討している。そのうちのいくつかの著作が死の哲学の特定の領域にたいして行った分析は、かなり奥深いものである。ただここで指摘しなければならぬのが、これらの著作は、中国的な特色をもつ死の哲学の体系を構築するという方面においては、明確な分野の意識はなく、研究対象・研究方法・基本内容といった具体的な問題にたいしても分野の確立という視点からの踏み込んだ議論はされていない。

比較して言うと、段德智は『死の哲学』『死亡哲学』のはしがきの部分で、上述の問題にたいして初步的な見方を提出している。彼は、哲学の一分野として死の哲学が死亡学と異なるところは、それが死の必然性と偶然性・死の終極性と非終極性・人生の有限性と無限性・死と永遠なる生の個性性と群體性などの問題の研究を重視すべき点にあると考える。鄭曉江の『生死学』は、次のように強調している。生死哲学の基本的な枠組みは、「生命と生活」の緊張から出発しなければならない。そして、生活と生命を、人生という統一体のなかの切り離すことのできない二つの主要な部分と見なし、さらに「生と死の滲みあい」を、生死哲学の核的觀念であるとする。かくして、生と死とが相即不離であり、緊密に連関するという意識を樹立し、これを基礎に、「死の超越」を生死哲学が到達しなければならない最終的な目標であると見る。こうして、人々に教育を施して、より幸福な生活、さらには端然と死に向き合うことを会得させるのである、と。筆者の『死、そして生きる——死の現象学の視野における生存倫理』『死、而後生——死亡現象学視域中的生存倫理』は、死の現象学の本体的基礎・主要な研究方法・基本体系の構築にたいして深いレベルでの哲学的分析を行っている。そのなかで「人は、死という意識に基づいて、生きる信念を構築し、そしてそれを外在化させて文化創造活動とする、こ

のような総合統一の歴史性が「ここにあり」という概念を提出している。人類はまさに自己の死という必然性を意識してこそ、肉体の死に打ち勝ち、超越し、これによって引きおこされた虚無感と恐怖感を克服するために、真・善・美・聖といった各種の生きる信念を構築できる。そしてこれらの生きる信念を外在化させて様々な形式的文化創造活動とすることで、有限の生命をして無限の価値と意義とを顕現せしめることができる。以上が本書の主張する内容である。ここで紹介した学者が構築・描写した死の哲学的理論のイメージは、もとより死の哲学にとつて唯一可能な観点・見解を代表できるものではなく、さらに発展すべき各種の可能性をなおも残している。しかし、彼らの研究成果は、学界における死の哲学の理想的な分野のタイプの構築という、一種の学問上の追求を確かに表現している。

第二に、中国と外国における死の哲学にかんする比較研究の学術水準の向上について、である。

グローバル化は、様々な国家・地区・民族の思想文化観念に大きな衝撃をもたらし、その持続的拡張により、人々は各種の文明モデルの優劣を深く再認識するにいたった。その間、ウィーコ・クロッチェ・トインビー・コリングウッド・シュベングララーらを代表とする文化平行比較モデル、およびハンチントンらを代表とする文化衝突比較モデルなどが現れた。歴史と現実から見れば、グローバル化が引きおこした文明比較ブームはすでに世界各国が真剣に向き合わなければならない問題となっている。生死哲学と比較というと、近年来、中国では一部の国内外の生死哲学比較研究の論著が出版された。たとえば、国内の著名な学者、湯一介とフランスの科学者、シャビエール・レ・ピションとの共著『生死』という本は、中国国学の大家とフランスの敬虔なキリスト教信者である科学者とは、それぞれ個人的な生死の体験を描写していて、東の文明を代表する儒家と西の文明を代表するキリスト教の生死観について、躍動的かつ直観的に叙述している。読んでみると、味わい深い作品である。張祥龍の『ハイデガー思想と中国の天道』〔海德格爾思想与中国的天道〕と那薇の『道家とハイデ

ガ―の相互解釈』『道家与海德格爾相互詮釈』は、多くの章節を用いて、中国伝統の道家における生死観と、ハイデガーの死の思想とについて、比較研究している。劉小楓の『救済と逍遙』『拯救与逍遙』は、多くのレベルから、儒・道・仏の生死観、およびキリスト教の生死観について、深い解釈をしている。その論述は詳細、文章は優美で、手放せない一冊である。高旭東の『生命の樹と知識の樹』『生命之樹与知識之樹』においてなされている中国と西洋の生死観の比較研究も、かなり特色がある。

この三十年来の中国学界における生死哲学の比較研究の特徴をふりかえると、ひとつめには国内外における比較文化研究のブームのなかで、生死哲学比較研究の著作は、とても少ないことが挙げられる。筆者が上に挙げた論著以外の、専門的な著作を探し出すことは極めて難しい。そして二つめには、この少ない比較研究の成果のなかで、マクロのレベルから中国の伝統的な儒・仏・道と西洋の古代ギリシア・ローマ哲学、およびキリスト教哲学、そして近現代の哲学を比較した論著が占める比重がやや大きく、反対に、ミクロのレベルから深層的な研究を行った論著はやや少ない、ということである。筆者が思うところでは、グローバル化の波が絶えず高まる今日、中国・外国における生死哲学の比較研究は、事の趨勢からして当然なされるべきものである。その際に、わが国の生死哲学比較研究を深化させるには、マクロのレベルの比較研究を持続的に進めるだけでなく、ミクロのレベルからも、中国・外国の伝統的な古典的著作について個別の比較研究を進める必要がある。こうしてはじめて、東西洋の生死文化の本質的な差異を正確に見出すことができるのである。儒家とキリスト教の生死観の比較研究を例とすると、『論語』・『孟子』と『聖書』中の四福音書・パウロ書簡などの經典テキストについてミクロのレベルでの比較を行うことで、儒家とキリスト教の生死観の異同を見出すことができる。そして、両者の生死観がそれぞれもつ特徴にたいして、総合的な判断が下せるようになる。そうすることで、中国と西洋の生死文化が、それぞれの長所をとり、自らに足りない部分を補えるようになるのである。

る。

第三に、死の哲学研究の根本的目標を明示することである。

死の哲学は哲学の一分野として、もとより多くの深層的な哲学上の理論的な問題に触れているが、根本的にはそれよりも、極めて重要でとても切迫した生活上の実践的な問題なのである。このため、死の哲学を研究する過程で、死という問題に形而上的な検討を加えることで、全人類文明の成果からこの問題に関連する各種の偉大な智慧を広くとりいれる以上に、死の哲学の応用研究を強化し、人々がこの問題を解決する際に、死の哲学が発揮する実務的指導作用を高めることが、より重要である。死の哲学の目標である社会改善を実現するには、人々が死の哲学の性質を、正確かつ明晰に認識することが必要である。死の哲学は、おそらく永遠に科学の程度には到達しえないであろう。なぜならば、死の哲学は、科学的な意味での事実判断における真偽を旨としているのではなく、道徳面で美醜を見抜くという意味での価値の判断における善悪・美醜を核心としているからである。このような意味からすると、各種の宗教の伝統が人類に提供している、死を超越する方法は、科学のレベルから見ると、雲をつかむような実体のないものなのかもしれないし、さらには、唯物主義者が考えるところの迷信の要素で満ちているのかもしれない。だが、それが一般大衆の病痛を取り除くことができ、人々が死に恐怖する心を克服するのに有効な手助けとなることができ、しかも社会の調和・安定と長期的な平和に有益であるのならば、それは、道徳倫理的な意味で善良なものにほかならないし、美醜を見分ける判断という意味で、美しいものにほかならないのである。

〔註〕

- 1 近年来、大陸の学者である鄭曉江氏は、台湾の生死学学界と幅広い交流を行っている。台湾学界の生死学の研究状況に関しては、鄭曉江著『生死学』（台湾揚智文化事業股份有限公司，二〇〇六年十二月版第二十七頁）を参照。
- 2 『論語・為政』

（翻訳 柳幹康）